

# 記者、研究者 被災地巡る

## みやぎ円卓会議 連携強め教訓発信



「兼用堤」の計画現場で三浦さん（左端）の説明に耳を傾ける参加者＝19日、気仙沼市本吉町の大谷海岸

初めて企画した。報道12社と東北大災害科学国際研究所、仙台管区気象台から計約30人が参加。気仙沼市本吉町の大谷海岸では、国道45号をかさ上げして防潮堤の機能を持たせる「兼用堤」の計画現場を視察した。大谷里海（ちか）づくり検討委員会の三浦友幸さん（36）から「砂浜を守るため、関係者が部分的合意を積み重ねて案がまとまった」との説明を受けた。

同市では、住民の3割に当たる93人が犠牲になった杉ノ下集落や、再建した水産加工業「足利本店」、陸前高田市では大規模かさ上げ工事が進む市街地なども訪問。被災当時の状況と現状を語り部らから取材した。

ツアーには河北新報と東北放送のほか、北海道新聞、東京新聞、新潟日報、中日新聞、神戸新聞、中国新聞、高知新聞、西日本新聞、大分放送、南日本放送の報道各社が参加した。

いのちと地域を守る

全国の地方紙や放送局の記者、研究者が東日本大震災の被災地を巡るツアーが

19、20の両日、気仙沼、陸前高田両市であった。メディアと学術が連携を強化し、震災教訓の伝承と発信に生かそうと、連携組織「みやぎ防災・減災円卓会議」（事務局・河北新報社）が